日本透析医学会学術集会 演題発表

当院の２つの演題が

ゴールデンリボン賞を受賞

今回は６月23日、24日、25日に、パシフィコ横浜で行われた学術集会について、腎センターの帯金師長にお話を伺いました。

今回、当院腎センターから、

①鈴木洋子（医療補助）
「可動式感染性廃棄物専用ＢＯＸの考案　～透析室ヘルパーによる安全性への配慮～」

②山田尚代（看護師）
「固定チーム活動で取り組んだ患者指導　～体重増加のグラフを利用した患者指導の試み～」

③大柳恵子（看護師）
「自らが行動できるために　～継続した防災対策の取り組み～」

④岡田浩子（看護師）
「セルフケア行動変容プログラムで効果があがった患者の症例～食べる気が起きない患者への関わりを通して～」

⑤朝比奈恭子（看護師）
「腎センター医療関連感染を防止する為　～エビデンスに基づいた感染対策の見直しから」

⑥杉本幸枝（看護師）
「思い込みミスをなくすために～チェックシートの検討をして～」

⑦帯金里美（看護師）
「セーフティマネージャーとしての関わりを変えて　～ヒヤリ・ハット委員との連携を強化して」

⑧沼野正浩（医師）
「塩酸バラシクロビルにより精神神経症状を呈した維持透析患者の２症例」

以上、８つの演題を発表しました。演題発表は、エントリーの時点でふるい分けをされるのですが、当院からエントリーの演題は全てが会場発表に採用され、それだけでも光栄であるのですが、さらに朝比奈看護師と杉本看護師の２演題は、ゴールデンリボン賞も受賞しました。

ゴールデンリボン賞は今年からの取り組みで、今回の透析医学会学術集会へ全国からエントリーのあった３、０００近い数のポスター発表のうち、特に内容的に優れ、積極的な取り組みにより、有効な成果の現れた、90の演題に対して、この賞が授与されます。

朝比奈さんの発表

今回、この賞を受賞することができたのは、演題が注目されるべきものだったのはもちろんのこと、腎センターの職員みんなで応援し、発表者をバックアップしたことが大きな要因だったようです。

発表者も自ら勉強し、様々なテーマで研究するという経験により、仕事への自信と余裕がもたらされ、行動の変化があらわれています。

このような大きな学会は、全国の医療関係者との、共通の学びの場であり、交流の場でもあります。お互いの取り組みや研究を交換する事によって、切磋琢磨されていることが実感できます。

今後も、よりよい病院をめざして、私たちは研鑽していきます。

おなじく受賞した杉本さん